

こういう働き方もあるって みんなに知らせたい!

今回、伊藤隼也は千葉県立四街道特別支援学校（四街道市）を訪問。
子どもたちが安心して授業を受けられるために医療的ケアを行う看護師、齋藤一美さんに話を伺いました。



vol.17
千葉県立四街道
特別支援学校
非常勤講師

特殊な聴診器で教師とともに呼吸の状態を確認する齋藤さん。

教室を回って生徒の安全を
確認するのも仕事のひとつ

伊藤 先ほど少し齋藤さんの仕事ぶりを拝見いたしました。生徒さんのサチュレーションを確認したり、経管栄養をされていたり。生徒さんのお母さま方もいらして、賑やかでしたね。
齋藤 いつもこんな感じですか。
伊藤 齋藤さんが生徒さんの手をずっと握っていたのが印象的です。
齋藤 あの子の手があまりにも冷たかったものですから。サチュレーションも測れませんが、からだ冷えていたらつらいだろう、と。
伊藤 ここには重症心身障害のお子さんのほかに、どんな生徒さんがいるのでしょうか。
齋藤 筋ジストロフィー、喘息の子が多いですね。気管切開をした子、心の病を抱えた子も来ています。
伊藤 となりに病院（下志津病院）がありますよね。皆さんそこからここに通ってこられるのですか？
齋藤 そういう子が6割くらいですね。病院と学校は廊下でつながっているのですが、車イスでも移動はそんなに難しくはないです。あとはご自宅から通ってきています。



Profile

千葉県立四街道
特別支援学校
非常勤講師
さいとう かずみ
齋藤 一美さん



国立千葉病院（現国立病院機構千葉医療センター）附属看護学校を卒業後、独立行政法人下志津病院へ。外科病棟、筋ジストロフィー病棟を経て、副看護師長として筋ジストロフィー病棟と重症心身障害を担当する。2006年4月から四街道特別支援学校にて勤務。

伊藤 齋藤さんは看護師ですが、ここでのようなお仕事をされているのでしょうか。具体的に教えてくださいませんか？
齋藤 給食時の医療的ケアのほか、人工呼吸器にトラブルが起きないようにチェックしたり、痰の吸引をしたり、バイパップを取り外したり。いつもは授業のジャマにならないよう、そっと教室を回って、子どもたちが安全に授業を受けているかを観察しています。時間があるときは、自立活動という授業に参加して、先生方のお手伝いをすることもありますね。

新人のときは外科病棟で、その後、筋ジストロフィーの病棟に10年ほどいました。それから小児外来を経て、重症心身障害の病棟への異動を希望し、そこに3年ぐらいいました。
伊藤 重症心身障害の子どもたちを看たいと思ったわけですね。
齋藤 はい。筋ジストロフィーの病棟にいたとき、何度か重症心身障害の子どもたちとすれ違って、そのときに思ったんです。筋ジストロフィーのお子さんって肢体は不自由なのですが、自分ではつきり自分の意思を伝えられる。訴えることができるんです。一方で、重症心身障害の子どもの場合は、私たち看護師がきちんと見つけてあげないと、訴えが届かない。だからこそ、そういう子どもたちに看護師としてしっかり関わっていききたい、と。
伊藤 齋藤さんはそこに看護の高い専門性、必要性を感じたのですか。
齋藤 そうかもしれません。
伊藤 その「訴えられない」ということについて、もう少し具体的に教えてくださいませんか。
齋藤 たとえば人工呼吸器を付けている場合、私たちがちょっと目を離しただけで、その子が苦しくなってしまうことがあります。だからこそ、そうなる前にサチュレーションなどを確認し、痰の吸引をしてあげることが大事な

看護を、看護師を必要とする場合は医療現場以外にもたくさんある。齋藤さんの働く「教育」という現場もその一つだ。

伊藤 齋藤さんが学校で働き始めて3年半ぐらいと伺っています。そもそも看護師になったきっかけは？
齋藤 それはえっと……マンガの『キャンディ・キャンディ』です。ナースキヤップをかぶってみたかったというのがありますね（笑）。いくつかりたいことはありましたが、最終的に人の役に立って仕事に就きたいと思って、この道に進みました。
伊藤 看護師になってからは、どちらにお勤めをされていたのでしょうか。
齋藤 ずっと下志津病院にいました。

伊藤 齋藤さんが学校で働き始めて3年半ぐらいと伺っています。そもそも看護師になったきっかけは？
齋藤 それはえっと……マンガの『キャンディ・キャンディ』です。ナースキヤップをかぶってみたかったというのがありますね（笑）。いくつかりたいことはありましたが、最終的に人の役に立って仕事に就きたいと思って、この道に進みました。
伊藤 看護師になってからは、どちらにお勤めをされていたのでしょうか。
齋藤 ずっと下志津病院にいました。



生徒の“がんばり”を見守り、最後に少しだけ手を差し伸べる。こうしたゆとりある接し方が看護の場でもできたら、と思う。



教室で行われる自立活動の様子。一人ひとりに教師がつく。



です。——とは言っても、異動したばかりのときは、自分でこの子たちをちゃんと看られるだろうか、不安で仕方ありませんでした。伊藤 今はどうですか？ 不安は払拭されましたか？ 齋藤 そうですね。子どもたちの表情に目がいくゆとりも出てきました。毎日見てみると、表情が違ふ。実はこの子たちは「訴えられない」わけではな

伊藤 そうはいっても、ここでは一人のお子さんに、教育と医療という2つの社会が関わっている。筋ジストロフィーや重症心身障害の子どもたち一人ひとりに教師がついているし。余裕やゆとりがあるなって、僕なんかは感じました。

伊藤 でも、それほどまでに充実して仕事していた病院を辞めたわけですよね。なぜですか？ 齋藤 仕事が忙しすぎたというのもありましたし、20年以上勤めたし、子どもの世話もしたかったので、少し休職してもいいかなって。伊藤 そうだったんですか。でも、その後、わりとすぐにこちらに再就職されていきますよね。そのいきさつを教えてください。

齋藤 辞めてから2カ月ぐらいいして、学校から「週に3日ぐらい看護師さんが来てくれると助かる」というお電話をいただきました。重症心身障害を見ていたのは3年だけだったので、十分やりきれないという気持ちはありましたが、実は、家にいるようになって時間をも

ここで働いていた看護師から、「病院は医療の場だけれど、ここは教育の場。看護師は「歩引いて」と言われたんです。最初は「えっ？」って思いました。伊藤 どういうことですか？ 齋藤 たとえば病院で働いていると、痰が絡んだらすぐに吸引しよう、となるのがふつうです。しかし、学校では吸引の代わりに体位を動かすとか、子どもの持っている力を少し引き出し、どうしても無理なときだけ、私たちが吸引するという感じなのです。伊藤 確かに病院と違いますね。齋藤 それについては当初、先生方のやり方に戸惑いがあったのは事実です。早く吸引したほうがいい、その方がこの子も楽になるって思っていました。伊藤 確かに、今は違いますね。子どもたちが自分でがんばろうとしているのを止めちゃいけないって、そう思っています。そういう意味では先生や生徒さんが主体、看護師はあくまでもサポートなんです。

二次使用禁止

伊藤 復職に際して、本来は自分の思い描くような働き方ができるのが理想なのでしょうが、やっぱり今の医療現場では難しいですか？ 齋藤 簡単ではないですね。私の場合は、家事や育児など、家庭のことをもっとしつかりやりたいと仕事を辞めたので、復職するときは「仕事と家庭を両立させられるところまで」という気持ちがありました。こうやって身近に条件にあった仕事が出てきて、本当にラッキーだったと思います。

伊藤 齋藤さんは学校から電話をもらうまで、看護師として特別支援学校のような場所で働くことができたということを知っていましたか？ 齋藤 いいえ。ほかの看護師もあまり知らないかもしれません。先日、同窓会があった私の仕事のことをみんなに話したら、何人かから「どうすればそういうところで働けるの？」って連絡

齋藤 こんなふうにと子どもたちと接することができるとは、いいですね、という感じでした。病院は忙しく、なかなかここまで手をかけられなかったんです。伊藤 本当は医療現場でこういう看護ができるというけれど、現実には難しいですね。先ほどの吸引の話も含め、特別支援学校のようなところでは、どんなことをしているのかを知っている看護師さんって、案外少ないと思う。齋藤 だから先生たちには、「もともと病院に行くと、アピールしない」とね。伊藤 僕としては、こういう働き方もあるということ、齋藤さんからどんな発信していいかってほしい。

齋藤 そうですね。こういう働き方もあって、みんなに知らせないと。伊藤 復職したい、新しい仕事を求めたい、そんな看護師のためにも！ぜひ、現場から声をあげてください。

伊藤 復職に際して、本来は自分の思い描くような働き方ができるのが理想なのでしょうが、やっぱり今の医療現場では難しいですか？ 齋藤 簡単ではないですね。私の場合は、家事や育児など、家庭のことをもっとしつかりやりたいと仕事を辞めたので、復職するときは「仕事と家庭を両立させられるところまで」という気持ちがありました。こうやって身近に条件にあった仕事が出てきて、本当にラッキーだったと思います。

伊藤 復職に際して、本来は自分の思い描くような働き方ができるのが理想なのでしょうが、やっぱり今の医療現場では難しいですか？ 齋藤 簡単ではないですね。私の場合は、家事や育児など、家庭のことをもっとしつかりやりたいと仕事を辞めたので、復職するときは「仕事と家庭を両立させられるところまで」という気持ちがありました。こうやって身近に条件にあった仕事が出てきて、本当にラッキーだったと思います。

伊藤 復職に際して、本来は自分の思い描くような働き方ができるのが理想なのでしょうが、やっぱり今の医療現場では難しいですか？ 齋藤 簡単ではないですね。私の場合は、家事や育児など、家庭のことをもっとしつかりやりたいと仕事を辞めたので、復職するときは「仕事と家庭を両立させられるところまで」という気持ちがありました。こうやって身近に条件にあった仕事が出てきて、本当にラッキーだったと思います。

学校の主役は生徒と教師 看護師はあくまでもサポート役

伊藤 仕事の話に戻りますが、先ほどお子さんに聴診器を当てていましたよね。耳管が2つ付いていて、片方は齋藤さん、もう片方は教師の方が当てていました。ここでは病院と違って教師とチームを組んでいるわけですが、そこに違いはありますか？ 齋藤 違いは大きいです。実は以前、



千葉県立四街道特別支援学校

1965年、病弱養護学校として設立。筋萎縮症や心疾患、腎疾患、喘息など慢性疾患を抱える児童、生徒に対して小学校および中学校の準ずる教育を施す。2009年度の11月1日在校生は77人、職員数は75名。看護師は非常勤

講師という立場で子どもたちの支援に関わる。



「病気の子どもへの理解のために」は一般向けに全国特別支援学校病弱教育校長会が主体となり制作した、病気の子どもへの教育意識の理解を深める支援冊子です。現在、白血病、脳腫瘍、筋ジストロフィーが病名別に紹介されています。学校ホームページよりぜひご覧ください。http://www.chiba-c.ed.jp/yotsukai-do-sh/



伊藤隼也 (いとうしゅんや)
写真家・医療ジャーナリスト
医療情報研究所代表
患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中
ホームページ shunya-ito.tv